

々に教へる所は少くないであらう。たゞ遼代の儀衛を示す資料として使用してゐる奉天の國立博物館所藏の銅鐘は、果して關野・原田兩博士のいはれる如く遼代のものであるかどうかについては疑問を抱いてゐる人もある様である。

「元明時代の質契約研究」元明時代に於ける質契約文書に關する精密な研究である。動産質、不動産質、不動産抵當、人質の四つに分類し、元典章、通制條格、事林廣記に見える至元雜令、我が内閣文庫にのみ傳はるといふ新編事文類聚啓劄青錢、明律を始め、あまたの文獻を使用して契約文書の形式、内容の解明を試みてゐる。難解な史料を克明に判讀して當時の私法を復原した勞は、著者にとつては手慣れた事であらうが、驚くべきものである。たゞ引用の元典章記事に、陳垣の元典章校補を參照してゐない所がある様に思はれた。

「蒙古の音楽については、現在蒙古に於て行はれてゐる音楽は歌謡曲と合奏曲とに大別でき、歌謡曲の方が重要であるといつて、歌謡曲の歌詞と旋律を紹介し、樂器についても説明した概説的な讀みものである。

その他江上氏翻譯のマール著「オルデンブルグ探檢の回鶻文書」に見える息子質入の文書は、元初回鶻人の社會經濟生活の一面を物語つて興味がふかい。又「書評」欄に見える同氏紹介の Desmond Martin の「綏遠歸化城北方の景教遺蹟に關する豫備報告」は綏遠省百靈廟附近の景教遺物ののこつてゐる汪古部の遺蹟に關する注目すべきものである。蒙古史讀本の第二講は、史前時

代より五五五年端端が突厥に滅されるまでをとりあつかひ、蒙古語文語楷梯は第三講として動詞の説明である。

本號は内容豊富で鬱金色の外皮も快く、出来栄はよろしい。しかし發行があまりに不規則なのは感心できない。年二回の刊行は守つてもらひたいと思ふ。(菊判、二二〇頁、昭和十三年十二月、善隣協會發行、價壹圓五拾錢)(外山軍治)

### 中國疆域沿革史

(中國文化史叢書第二輯)

顧頡剛・史念海共著

本書が長沙で出版されたのは已に昨民國二十七年三月のことであるが、我々がこれを手にし得たのは漸く本年一月の半ば頃のことであつた。商務印書館の中國文化史叢書第二輯の中に顧氏の中國疆域沿革史の名が豫告されて以來、これを待望すること久しかつたのである。著者顧頡剛氏が現在支那古代史に於ける第一流の學者であり、又その多方面に亙る研究が夫々の分野に花々しい影響を與へてゐることなどは今更事新らしくいふ必要もない。略歴及び著述に就いては東洋史研究二卷六號に小川茂樹氏の解説されたものがある。(現代支那名家著作目錄の六)氏が歴史地理の研究に對して熱意を持たれるに至つたのは、比較的新しいことであるが、一流の科學的研究法を以て着々實績を上げ民國二十三年には兩漢州制考(慶祝蔡元培先生六十五歲論文集下冊)の如き名編を世に送つた。數年來萬頁半月刊を主宰して新進の專家を傘下に集め

沿革地理研究の旗幟を掲げて禹貢學會の名はこの方面に指導的な地位を占めるに到つた。史念海氏は顧氏直系の門下であるべく着實な方法を以て主として漢代の郡國を研究されてゐる人である。本書は専ら顧氏の手によつて草せられたものであらう。

中國疆域沿革史の編纂は歴代の疆域沿革圖や地名辭典の編纂など、共に早くから禹貢學會の重要な事業計畫の一つとして取上げられてあつた。その完成には日未だ遠いことであらうし、又今回の日支事變の爲にそれ等の計畫はもとより中絶してゐるのであらうが、本書の如きはその大綱を示したものとしてみことに期待に背かぬものであると思ふ。その結構を見るに、先づ疆域沿革の概略を述べ、學史の要領を説き、上夏殷より下民國成立後に到るまで、章を分つこと二十六、歴代疆域の沿革を論じ區別制度の變遷を概説してをる。徒らに歴代地理志を連續せる疆域沿革表といつたさながら砂を嘔む體のものではなく、例へば秦には長城、隋には運河等の特殊な問題を加へ、最新の學説を採用して表題から見れば最も無味乾燥ともいふべきこの種の書に一種の潤ひを與へてゐる。後の疆域沿革史は本書を以て模型とすべく、この點本叢書に收められた王庸氏の中國地理學史に比べて水も漏らさぬ態度といふべきか。王氏の書が單なる地理書籍史に過ぎず、しかもその年代は宋以前に止まり、飛んで最近二十年來の地理學の進歩に説き到れる如きものゝ比ではない。ついでにもう少し王氏の書について困ることをいふならば、例へば地誌の分類に於いても水道に關する書が餘り低く扱はれてゐること、明清の地方志の編纂、歴

代地理志の成立、元以後一統志の纂修等に殆んど觸れる所なく、中にも清朝に於ける地理學史がなく最近の學説の一向とり入れられてをらぬことなどである。

もとより本書にも缺くる所は多々あらう。秦郡考略に於いて専ら全祖望の漢書地理志稽疑に據り、王國維の秦郡考を無視せる如き、又宋代に例をとれば、都市の分布、鎮市の發達、國境問題特に燕雲十六州に就いては未だ述ぶる所あるべく、著るしきは西夏の疆域には全く觸れてをらぬ如きものである。縣の等級に關する人口の標準に關しても續資治通鑑長編には明瞭にその數を示す記事がある。更に近代に於いては產業交通の發達等經濟地理的な方面、人口の分布等出來得れば加へて欲しかつたなど、思ふのは、隨を得て蜀を望むの類かも知れない。參考書の上げ方は甚だ面白くないが、これ又本叢書の如き概説書に於いてこれ以上文句をつけるのは無理であらう。とに角この叢書の中では最もすぐれたものの一つであるに違ひない。各代の記述分量を略々平均させてゐる爲に近代に至る程何となく物足らぬ感じがするがこれも已むを得ない。各代毎に略圖を加へてゐる親切さをも特記したい。隣國の疆域沿革には決して無頓着であり得ない我々は本書の如き恰好の概説書を得たことを喜び心からこれを推薦する。私は進んでこれを翻譯したいと思つてゐる。(四六版、三一〇頁、附圖二十七葉、民國二十七年三月、長沙商務印書館發行、定價二元五角)(日比野丈夫)